

土谷 武『開放IV』

1998年／軟鋼／269.5×420×410cm／宇都宮美術館蔵 撮影 ©斎藤久紀

彫刻家土谷 武（1926～）は、鉄や石を用いた個性的な彫刻あるいは立体作品で知られています。東京美術学校彫刻科を卒業し、ロダン以降の近代彫刻の伝統をふまえた具象彫刻を制作していた土谷は、1961年から2年間にわたるフランス留学を機に、「構成」による抽象彫刻を開始します。常に素材と正面から向き合い、ものを見つめ、考えながら自らの手で作品を創り出してきた土谷ですが、1990年代に入ってから、薄い鉄板を叩くという新たな手法により、彫刻をまたひとつ新たな地平へと導きつつあります。本展では、初期の具象彫刻から近年の《植物空間》のシリーズにいたるまでの87点の作品により、土谷 武の全貌をご紹介します。（副主任学芸員 平野扶佐子）

茨城県近代美術館

土谷 武 展 しなやかな造形、生成するかたち

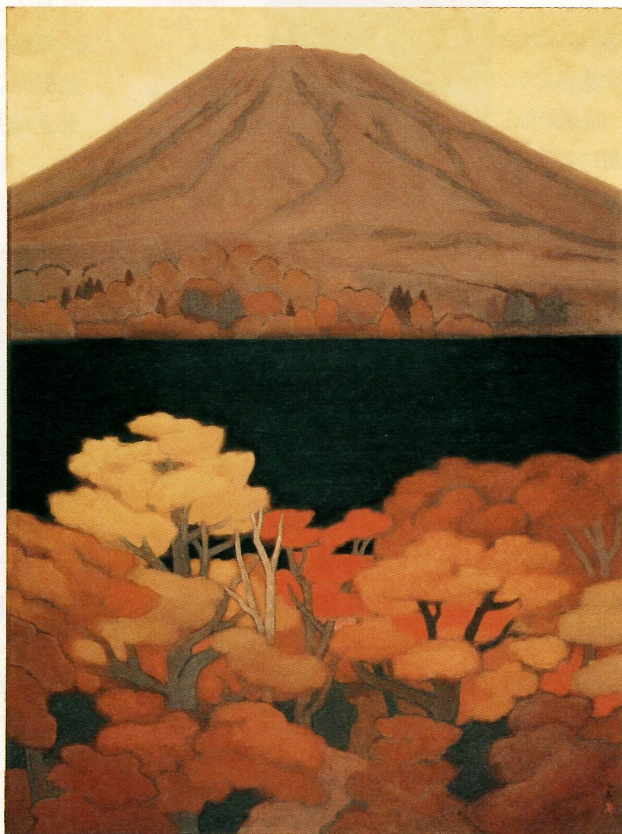
1999年4月4日[日]～5月9日[日]

Contents

- 1 土谷 武 展
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4・5 美に遊ぶ
スケッチ会
- 6 探訪／伊藤東彦先生を訪ねて
『自然を慈しむ布目の草木花』
- 7 [企画展紹介]
前田寛治の芸術展
京都の日本画展
- 8 [企画展紹介]
「四つの視点—人間像の表現」展
あとがき

游美

Yubi
No. 32



東山魁夷『光昏』こうこん

1955年
181.7×136.4cm
第11回日展出品
日本芸術院蔵

太平洋戦争末期、熊本で爆弾を抱き、戦車に突っ込む訓練をしていた東山は、ある日ふと目にした阿蘇山に「涙が落ちそうになるほど感動」したといいます。死と向かい合っていた東山の眼には、日頃見慣れた平凡な風景の中に、自然のもつ生命観が映っていたのです。

この作品は、野尻湖から見た黒姫山を描いていますが、作品名を地名ではなく、光と暗さとの対比を意味する東山の造語「光昏」としたのは、黄昏時が「自然が息づく生命の実相として見える」時であり、その時感じた瞑想的で悲しげな自然の表情を描こうとしたからなのです。

東山の心を通して見た風景が我々の心の風景でもあったこと、そのことが多くの人々に愛された理由ではないでしょうか。（学芸員 中田智則）

永遠の祈り 東山魁夷展

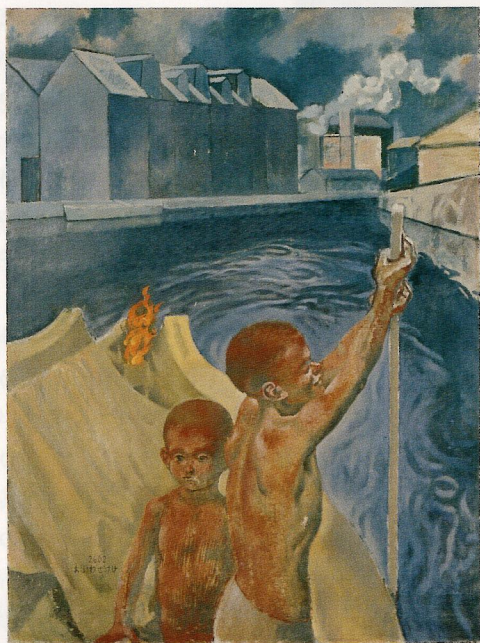
1999年9月11日[土]～10月24日[日]

Contents

- 1 東山魁夷展
- 2・3 副館長就任のあいさつ
[企画展紹介]
武井武雄展
杉全 直展
六大浮世絵師名品展
- 4・5 美に遊ぶ
美術鑑賞旅行
- 6 探訪／中山節子先生を訪ねて
- 7 茨城の画人たち
- 8 すばらしいミニ美術館めぐり
お知らせ／あとがき

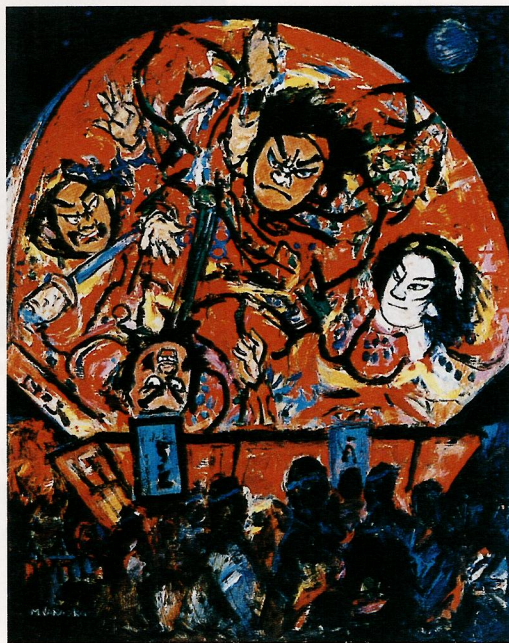
游美

Yubi
No. 33



大沢昌助『運河』

1942年
油彩／カンヴァス
130.0×97.0cm
練馬区立美術館蔵



奈良岡正夫『北国ノ祭』

1978年
油彩／カンヴァス
162.3×130.3cm
第10回日展出品
弘前市立博物館蔵

「中村 彝賞」は茨城県が生んだ近代洋画家中村^{つね}彝の優れた画業を顕彰するため、その精神にふさわしい高邁な制作活動に精進する画家に贈られる賞であり、当館では、この賞を記念して、受賞作家を順次紹介してきました。

今回は平成7年第4回受賞の大沢昌助（1903～97）、平成9年第5回受賞の奈良岡正夫（1903～）の二人の展覧会となります。

大沢昌助は二科展や国際展を中心に発表を続け、日本の洋画界を代表する画家として注目されました。

一方、奈良岡正夫は95歳を越えた今なお、日展や示現会を中心に意欲的に大作を発表しています。今回はこの二人の初期から最近までの油彩画作品各約50点を紹介します。（主査 清水 優）

中村 彝賞記念 大沢昌助・奈良岡正夫展

1999年12月11日[土]～2000年1月30日[日]

Contents

- 1 大沢昌助・奈良岡正夫 展
- 2・3 木内 克のことなど／木内 岬
茨城県陶芸美術館オープン間近か
- 4 美に遊ぶ
写真講座
- 5 探訪／東 韶光先生を訪ねて
- 6 茨城の画人たち／林 十江
- 7 [企画展紹介]
ハーバード大学コレクション展
玉川信一展
横山大観展
- 8 すばらしいミニ美術館めぐり
あとがき



パブロ・ピカソ 『母と子』

1901年頃
油彩/カンヴァス
112.4×97.5cm

ピカソは、1901年頃から1904年頃にかけてのいわゆる「青の時代」に、母子の主題を頻繁に取り上げました。一説によるとそれは、彼が当時訪れたサン＝ラザール監獄で目にした光景に触発されたものといわれています。女性の犯罪者のみを収容するこの施設には、子供を抱えた女性も少なくありませんでした。『母と子』のモデルになったのも、監獄に収容されていた親子だったのかもしれませんが、しかし、想像されるその悲惨な境遇とはうらはらに、母親の表情は幸せに満ちているように見えます。ここに描かれているのは、いつの時代にも変わることのない、聖母子像にも似た母性のイメージなのではないでしょうか。ピカソは、20代の初めにこの作品を描いています。人間の悲哀と苦悩に深い共感を寄せたその早熟な才能は、その後「バラ色の時代」を経て、1907年に絵画の革命ともいえるキュビズムを生み出すこととなります。

(企画課学芸員 今井 有)

Contents

- 1 ハーバード大学コレクション展
- 2 中村 彝作品『三崎海岸』について
美術館利用者数200万人達成
- 3 美に遊ぶ
- 4.5 美術鑑賞旅行
- 6 探訪／福田玲子先生を訪ねて
- 7 茨城の画人たち／河鍋曉斎
- 8 茨城県陶芸美術館オープン
企画展紹介
あとがき

2000年にみるモダンアートの100年 ハーバード大学コレクション展

2000年2月11日〔金・祝〕～3月26日〔日〕

游美

Yubi
No. 35



上村松園 『序の舞』

昭和11年(1936) / 絹本着彩・軸装
233.0×141.3cm
重要文化財

髪を文金高島田に結った若い女性が、振り袖姿で仕舞いの練習をしている。昭和初期の富裕な家庭の子女は、たしなみとして仕舞いを習っていたという。江戸時代の女性の風俗を描くことを得意としていた上村松園としては、珍しい作品のひとつと言えよう。

序の舞とは能の舞の一楽章の名で、序の舞、破の舞、急の舞とある内の、最も動きが少なく、静かな舞である。その静かな舞を舞う女性の張りつめた緊張感が、扇を持つ指の先から、着物の裾に隠れて見えなつま先まで、背景を排した画面の中に見事に表されている。後に松園はこの作品について、「何ものにも犯されない、女のうちにひそむ強い意志を、この絵に表現したかったのです」と記している。

(主任学芸員 平野扶佐子)

東京芸大美術館名品展

2000年6月24日[土]～7月30日[日]

Contents

- 1 東京芸大美術館名品展
- 2・3 就任にあたって 副館長
[ファミリー美術館2000]
子供の世界
[企画展紹介]
ホノルル美術館展
京都市立芸術大学創立120周年
記念展
20世紀美術の形と動き展
- 4・5 美に遊ぶ
ハロー! ミュージアムの紹介
- 6 探訪 / 富張広司先生を訪ねて
- 7 茨城の画人たち / 与謝蕪村
- 8 すばらしいミニ美術館めぐり
あとがき

游美

Yubi
No. 36



エドワード・ホッパー『踏切』

1922-23年 / 油彩 / キャンヴァス / 74.9×101.8cm / ホイットニー美術館、ニューヨーク
Whitney Museum of American Art, New York

ホッパーは毎年の夏をアメリカの東海岸、ニューイングランド地方を訪れては多くの風景画を描きました。この「踏切」を描いた20年代前半頃は、油彩以外にエッチング等の版画制作や水彩画を通して独自の絵画主題を見いだすための模索の時代でもありました。

この作品は、明るい日差しが画面全体に降り注いでいるのですが、中央に描かれた踏切の傍らに立つクラシックな木造の家は、妙に広い面積を占める周囲の荒涼とした背景の中にあって、どことなく不安な感じを抱かせます。こういった彼の作品の独特の寂寥感は、後年のホッパー絵画を予感させる特徴と言えるでしょう。この翌年、彼は個展の成功を機に、画家としての道を確立してゆくのです。
(係長 谷津喜美代)

なつかしのアメリカ

エドワード・ホッパー展

2000年12月2日[土]～2001年1月14日[日]

Contents

- 1 エドワード・ホッパー 展
- 2・3 父 小森邦夫を語る
- 4 探訪 / 栗原喜依子先生を訪ねて
- 5 茨城の画人たち / 立原杏所
- 6 美に遊ぶ
写真講座
- 7 [企画展紹介]
第2回現代茨城作家美術展
角 浩展 一幻想のロマネスク—
美術文化講演会
日本絵画の精華展
- 8 すばらしいミニ美術館めぐり
あとがき

游美

Yubi

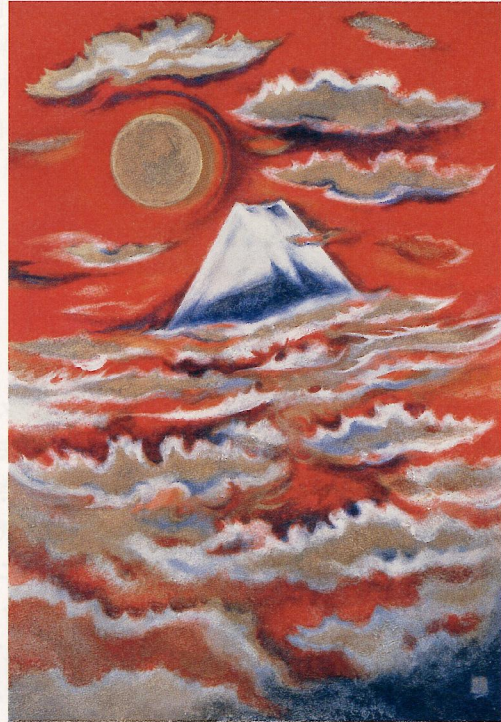
No.

37



下保 昭『那智』

1998年/168.0×100.0cm/作家蔵



川崎 春彦『荘厳』

1979年/119.0×82.0cm/霊友会妙一記念館蔵

自然の生命力を精神性豊かに描き続ける^{かほ}下保 昭は、水墨による山水画を極めようとしているが、この作品では、墨だけではなく黒や赤色の絵の具を使いながら、水墨調の静謐で神秘的な山水世界を創り出している。一方の、川崎春彦は、カラフルな色彩で、自然から得られる感動をエネルギーに描いているが、この作品では、富士山とそれを取り巻く雲の動きを、実に鮮やかに、かつリズムカルに描いている。対照的な2人であるが、その奥には、自然への賛歌と、新しい自分だけの日本画を創造しようとする強い意志を見ることができる。(学芸員 中田智則)

時代を超える日本画

山水新世紀 下保 昭

色彩七変化 川崎 春彦 展

2001年2月10日[土]～3月25日[日]

Contents

- 1 下保 昭・川崎春彦展
- 2 登録美術品初公開
[企画展紹介] 牛島憲之展
- 3 美に遊ぶ
[企画展紹介] 村山 密展
- 4.5 美術鑑賞旅行
- 6 探訪/川又南岳先生を訪ねて
- 7 茨城の画人たち/奥原晴湖
- 8 すばらしいミニ美術館めぐり
あとがき



ピーテル・ブリューゲル(父) 『野外での農民の婚礼の踊り』

(古い時代の画家によるコピー)

1570-80年頃／油彩／板／115×166cm

ピーテル・ブリューゲル(父)の代表作を忠実に写したこの作品の制作者はいまだに不明です。しかしこの画面を見る限り、卓越した技量を有した画家であったことは間違いありません。制作の年代もかなり絞られてきていることから、その名が明らかになる日もそう遠くはないでしょう。現代のような写真印刷などのない時代、優れた作品のコピーの制作は普通に行われていました。ブリューゲル(父)の死後も工房にはコピーの注文が多く寄せられたと考えられます。実際、ブリューゲル(父)の作品には様々な画家の筆による、数多くのコピー作品が残されていますが、この『野外での農民の婚礼の踊り』はその中でも、最も質の高いものの一つと言えるでしょう。(学芸員 井野功一)

アントワープ王立美術館所蔵 黄金期フランドル絵画の巨匠たち展

2001年7月14日[土]～8月26日[日]

Contents

- 1 黄金期フランドル絵画の巨匠たち展
- 2・3 就任にあたって 副館長
[企画展紹介]
イタリア彫刻の20世紀展
一色邦彦・彫刻とデッサン展
アンソール版画展
織—絹の美と技—
- 4・5 探訪／大内陸弘先生
大内正子先生を訪ねて
木村武山作「杉戸絵」初公開
- 6 美に遊ぶ
春の美術鑑賞旅行
- 7 茨城の画人たち／松本楓湖
- 8 すばらしいミニ美術館めぐり
あとがき

遊美

Yubi
No.
39

茨城県近代美術館

壮烈な画業

釘宮對岩展

2001年12月1日[土]～2002年1月20日[日]

釘宮對岩は、大正9年(1920)大分県臼杵市で生まれました。初め別府に暮らしましたが、まもなく祖父母の下に預けられ、大分市で少年期を過ごすこととなります。12歳で母とともに京都に移り、寺社や美術館をめぐり、日本の伝統文化を貪欲に吸収します。周文や雪舟、また曾我蕭白などの影響を受け、15歳の頃には同郷の福田平八郎に日本画の基礎を学び、昭和13年(1938)京都市立絵画専門学校に入学しますが、8ヶ月で自主退学することになります。京都の地で日本文化の伝統を知り、翌年には須田国太郎に油絵を学んでいます。昭和29年(1954)からは別府の中学校の教諭として教鞭を執りますが10年程で退職し、墨彩画や油彩画に新境地を求めて模索を続けました。昭和45年(1970)には最初の渡欧をし、画囊を肥やすとともに活発な創作活動を展開し、額装や絵巻物など音楽や文学の造詣に裏打ちされた作品を発表し、地歩を固めていきます。昭和58年(1983)に制作された雲水の後ろ姿を描いた『日月易流』(写真)は、果てのない旅を続ける釘宮自らの生き様と重なって、深い精神性が感じられます。昭和45年(1970)以降たびたび渡欧し、新境地を開拓し、昭和52年(1977)の『ペーターベン運命長巻』(国立ベルリン博物館蔵)、同54年(1979)織田信長の生涯に材を得た『修羅之巻』などの絵巻物はその代表的なものでしょう。「墨の魅力は、墨に魂があるから——」と自らい、墨に取り付かれ水墨画に命をかけた孤高の画家は、昭和61年(1986)茨城県関城町で急逝、66歳でした。

没後15年になるこの画家の回顧展として、大分市美術館に寄託されている作品を含む80余点で構成されます。大作『スサノオノ命』や代表作『ペドウィン』は話題を呼ぶことでしょう。

(企画課長 金原宏行)



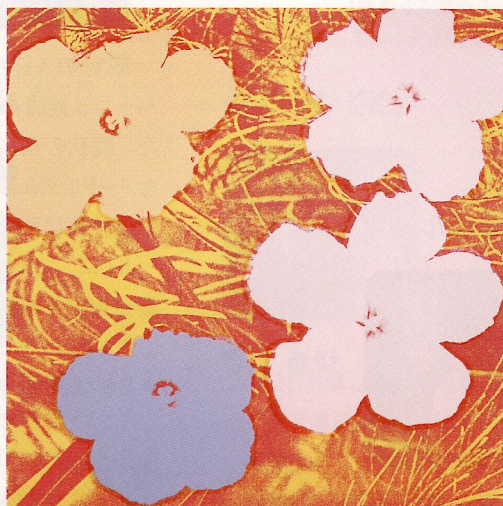
釘宮對岩作 『日月易流』

1983年／紙本墨画
95.0×33.0cm／大分市美術館蔵

Contents

- 1 釘宮對岩展
- 2・3 父 鈴木豊次郎を語る
- 4 探訪／田中路人先生を訪ねて
- 5 茨城の画人たち／山下りん
- 6 美に遊ぶ
写真実技講座
- 7 [企画展紹介]
福王寺法林・一彦展
大観・春草展
- 8 [すばらしいミニ美術館めぐり]
さしま郷土館ミュージアム
あとがき

游美



「ポップ・アート」という言葉は、1950年代初頭、イギリスの若い作家たちが大衆社会における文化や、芸術、そしてマスメディアなどについて話し合う中で使われはじめた「ポピュラー・アート」という言葉を元にして生まれたと言われています。しかし、ポップ・アートを文字通り大衆の側にぐっと近づけたのはアメリカのアンディ・ウォーホルでした。彼は、エルヴィス・プレスリーやマリリン・モンローなど誰もが知っているアイドルなどを、色や大きさを変えて繰り返し作品にしました。しかも、大衆雑誌やプロマイドに使われているのと同じ写真を元に、おもにシルクスクリーンという版画の技法を用いて同じ作品を何点も制作したのです。1960年代から70年代にかけ、西欧社会は大量生産、大量消費の時代を謳歌していました。大衆社会にあふれているイメージを大量生産の技法を使って大量に制作し、大衆に大量消費させるポップ・アートは、まさに時代が生んだ賜物だったと言えるでしょう。

資本主義社会の象徴であったニューヨークの世界貿易センタービルは、昨年9月11日に消え去ってしまいました。しかし、資本主義が生んだポップ・アートの手法は今も生き残り、新しいポップという言葉が今日では流通しています。「ポップ! ポップ!! ポップ!!!」展では、リキテンスタイン、ローゼンクイスト、ハミルトン、ホックニーなどアメリカ、イギリスのポップ・アートの代表的作家の作品に加え、日本の60年代のポップ作品とともに、最新のポップ・アーティストである村上隆や奈良美智の作品をも含めてご紹介します。(主任学芸員 平野扶佐子)

アンディ・ウォーホル 『花』(10点組より)

1970年/シルクスクリーン、紙/
各91.5×91.5cm/いわき市立美術館蔵

Contents

- 1 ポップ! ポップ!! ポップ!!! 展
- 2・3 美術鑑賞旅行
- 4・5 美に遊ぶ
版画実技講座
- 6 探訪/松浦松夫先生を訪ねて
- 7 茨城の画人たち/猪瀬東寧
- 8 すばらしいミニ美術館めぐり
あとがき

茨城県近代美術館

ポップ! ポップ!! ポップ!!! 展

2002年4月5日[金]~5月19日[日]